特集 親に笑顔を 子どもに夢を

不登校の子どもが全国的に増えています。文部科学省が10月26日に公表した2016年度問題行動・不登校調査結果によると、全小中学生に占める不登校の割合は1・26％と、過去最高になったことが分かりました。菊池市でも何らかの理由で学校に行けない子どもたちが増えています。

不登校は家庭や学校だけが考えるべき問題なのでしょうか。

苦悩する子どもの思いと支える人たちの声に耳を傾けながら、不登校について考えてみます。

case1 子どもの思い

自分を責め続けた

「出口の見えない真っ暗なトンネルの中をさまよっているようでした」。中学と高校で不登校を経験した山口諒大（やまぐちりょうだい）さんは、ゆっくりと語り始めました。

中学1年の冬。突然学校に行くのが怖くなり、登校できない日が続きました。「部活動も楽しくて友達とも仲良くしていました。なぜ行けなくなったのか、自分でもよく分からないんです」

将来有望なバレーボール選手として、両親や周りからも大きな期待を受けていました。「親から『なんで行かんとや』とひどく叱られました。毎日けんかしてずいぶん反発もしましたが、本当は『自分が悪い』と感じていたんです。なんで学校に行けないんだろう、なんで当たり前のことができないんだろう、親の期待にも応えられない…なんで…。ずっと自分を責め続けていました」

襲い掛かる深い闇

一番つらかったのは、誰にも自分の気持ちを理解してもらえないことでした。「つらい思いを吐き出すと少し楽になれたんです。それなのに、話しても全く理解してもらえない。だんだんと人に会うのが嫌になって、部屋に引きこもるようになりました」

人とのつながりを拒み、助けを求めることをあきらめた諒大さんに深い闇が襲い掛かります。「毛布をかぶって悩み苦しんでいたら、『もうおれなんてこの世からいなくなった方がいいんじゃないか』と考えるようになりました」

極限まで追い込まれた諒大さんを救ったのは母親の法子（のりこ）さんでした。「死のうと思って2階から飛び降りようとしたとき、母の大きな声が聞こえてきて我に返りました。親もどうすれば息子を助けられるのかと、毎日悩み、苦しんでいたのだと思います。それから少しずつ親と話し合えるようになりました」

多くの支えに救われた

現在19歳。初めて仕事を経験し、働く喜びを感じているという諒大さん。大好きなバレーボールも続けています。「不登校になってもずっとバレーを教えてくれた父。家にこもっていると外に連れ出してくれた母。いつもそばで見守ってくれた妹と弟、おじいちゃんおばあちゃん。導いてくれた先生。励ましてくれた友達……。本当にたくさんの人の支えがあり、今は前を向いて生きています。つらいこともたくさんあるけど、『一人じゃない』ということに気付くことができました」

優しく背中を押してほしい

諒大さんは自身の経験を踏まえ、周りの支えの大切さを訴えます。「自分と同じように苦しんでいる子どもは、きっと『この状況をなんとかしたい』と思っています。学校や習い事に無理やり行かせるのではなく、子どもの気持ちを聞いて、受け入れて、気長に支えてあげることが、そっと背中を押すことにつながります。そうすればきっと、僕みたいに前に進める日がやってくると思います」

「嘘つきじゃなくて人一倍正直者なんだと理解できるようになりました」と話す法子さん。「今でもたまにけんかするんですけどね」と笑う親子の間には、穏やかな時間が流れていました。

■キーワード　不登校

文部科学省は不登校の定義を「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しない、あるいはしたくともできない状況にあるため年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」としています。

case2 親の心情❶

「不登校」という現実を受け入れることができませんでした。

我が子が不登校になったとき、親は何に葛藤し、どのように子どもと向き合うことを決めたのでしょうか。諒大さんの母・法子さんに話を聞きました。

山口法子（やまぐちのりこ）さん（深川）

自分の常識では考えられない毎日

まさか自分の子どもが不登校になるなんて思いもしませんでした。病気でもないのに学校を休みだしたときは「嘘つき、怠け者」と思い、全く理解できませんでした。嫌がる息子を無理やり車に乗せて学校まで連れて行ったことも何度もあります。信号待ちで停車したとき、車から飛び降りて逃げ出した息子を泣きながら走って追いかけたこともありました。

自分の常識では考えられない出来事に苦しむ毎日。「なんで言うことを聞かないの。なんで当たり前のことができないの。私に恥をかかせないで！」と、現実を受け入れることができなかったんです。子どもを傷つける言葉を何度も言いましたし、手を上げることもありました。

将来は息子をバレーボールの全日本代表選手にするのが私の夢でした。その夢さえついえたと感じたときは、ものすごいショックでしたね。あるとき息子が私にこう聞いたんです。「なんで『勝つバレー』をせなんと？『楽しいバレー』じゃいかんと？」と。今思えば、無理やり学校に行かせようとしたことも、試合に勝つことばかり求めていたことも、いつの間にか息子を追い詰めていたんだと思います。周りの目や自分のプライドばかり気にして、息子の内面を見ようとしていませんでした。

受け入れたら楽になれた

当時、私の周りには相談できる場所がありませんでした。息子が高校2年になるまで、ずっと一人で戦ってきました。その5年間は、母親なのに息子を理解できず、受け入れることができなかった自分自身との戦いだったのかもしれません。

今まで自分が当たり前だと思っていたことが、そうでなくなったときの苦しみは本当につらかった。もし本音で相談したり話を聞いてもらえたりできる場所があったら、こんなに長い間苦しむことはなかったのかもしれません。

息子とぶつかりあう中で、徐々に現実を受け入れられるようになったんです。同時に、息子の内面が見えるようになりました。すると、「この子は嘘つきじゃない、正義感が強い子なんだ」と気付けました。「生きているだけでいい、笑ってくれるだけでいい」と思えるようになると、周りと比べることもなくなり、気持ちがスーッと楽になりました。自分本位だった私を変えてくれた息子に感謝しています。

case3 親の心情❷

同じように苦しんでいる母親を助けたい――。

「本音で話せる場所が無ければ、自分で作ればいい」
法子さんは9月、不登校や子育てに悩む母親の茶話会を自宅で始めました。
そこには、はりつめた心を解放する母親たちの姿がありました。

タン♬カルム
- ●とき　毎月第4土曜日　午前10時～正午
- ●ところ　菊池市深川24-5
- ●問い合わせ先　山口　☎080(1775)1642

本音で話せる場所づくり

土曜日の午前。法子さん宅の一室に、笑い声が広がります。茶話会の名前は「タン♬カルム」。フランス語で「穏やかな時間」という意味です。「つらい日常から解放され、穏やかなひとときを過ごしてほしい」との思いが込められています。

この日集まったのは、5人の母親。自己紹介に続いて、子どもの友人関係や学校での出来事、発達障害、将来の不安などを順番に話します。中には、涙ながらにつらかった経験を打ち明ける人も。すると他の母親がうなづきながら「うちもそうだったよ。きつかったね」と優しく声を掛けます。

「同じ悩みを持つ人同士だから本音で話せるし、相手の気持ちもよく分かるんです」と法子さん。ときには涙したり、ときには笑い飛ばしたりしながら、時間を忘れて語り合いました。

参加した母親はこう話します。「話を聞いてもらえて気持ちが楽になりました。ここに来なかったら今も一人で苦しんでいたと思います」「職場では誰にも共感してもらえなかったけど、ここではみんなが親身になって聞いてくれる」「思いを吐き出すと、ほかの人の声も聴けるようになりました」

親の笑顔で子どもに夢を

いつも笑顔を絶やさない法子さんは、苦しみを乗り越え、気づいたことがあります。「悩んで戦い続けるより、楽しく生きる方法を見つけた方がいい。親が人生を楽しんでいる姿を見せることが、子どもに夢を持ってもらうことにつながると思います」

case4 支援者の声❶

不登校は、子どもから社会へのイエローカード

不登校の子どもに、皆さんはどんな印象を持っていますか。20年にわたり子どもの不登校に悩む保護者に寄り添い、不登校への理解を広げるために活動する「登校拒否・不登校に学ぶフレンズネットワークくまもと」代表の江藤圭子（えとうけいこ）さんに話を聞きました。

不登校はダメなのか

不登校にはさまざまな背景や要因がありますが、多くの場合、子どもたちは自分の身を守るために「学校に行かない」という〝現象〟を起こしています。しかし、一般的に「学校に行かない子どもはダメな子」という認識があるため、子どもは自分を責め、大人は理解できず対処に困る場合がほとんどです。

私も以前は「学校に行かないなんてとんでもない！」と考える親の一人でした。不登校は悪いことだと思っていたんです。でも、それは間違いでした。いじめられ続けても無理して通学し、耐えられなくなって自傷する子どももいます。中には自ら命を絶つという最悪のケースも。不登校ではなくても、ストレスを抱えながら通学する子どもはたくさんいます。たまりにたまったストレスがあふれ出し、ある日突然学校に行けなくなることもあるのです。それが自分の身を守るための行為だとしたら「不登校は悪いこと」だと言えるでしょうか。

学校は本来、子どもが健やかに成長できる場所であるはずです。不登校は、子どもが発するSOSであると同時に、子どもの居場所が減っている社会に対するイエローカードなのかもしれません。

大人の常識で決めつけない

不登校やその傾向にある子どもは、学校に行きたくないという気持ちをうまく表現できないことがあります。あるとき小学生の女の子が「学校のプールにワニがいるから怖くて入れません」と話しました。たいていの人は「学校にワニがいるわけがない」と思うでしょう。でもその女の子は、学校が怖い場所だということを必死に伝えようとしていたのです。大人の常識で決めつけようとせず、まずは耳を傾けてください。話を聞いてもらえないと思ったら、子どもは口をつぐんでしまいます。話を聞いてくれると感じれば、それだけで安心します。

自己肯定感を高める

自分はダメな子だと思い込んでいる子どもは、自信と意欲を失っています。良いところを見つけてしっかり認めてあげましょう。昨日までできなかったことが少しでもできたら「良くできたね」と声をかけてください。お手伝いをしてくれたら「ありがとう」と感謝を伝えましょう。些細なことでもいいんです。少しずつでも子どもの自己肯定感を高めることが、次の一歩を踏み出す力になります。

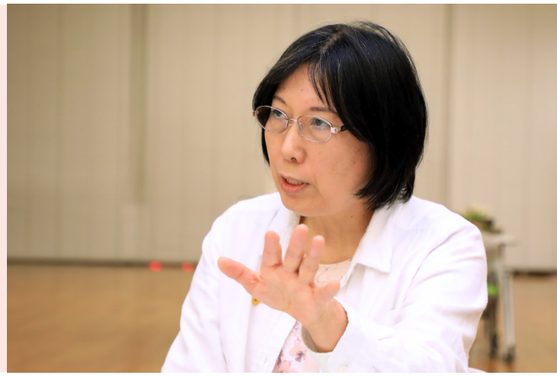
保護者を救う場所づくり

悩み苦しんでいるのは保護者も同じです。自分の子育てが間違っていたのかと失望したり、胎教がいけなかったのかと生まれる前までさかのぼって責任を感じたりする母親もいます。

周りの目が気になり誰にも相談できない、相談できたとしても理解してもらえない、すがる思いでフレンズネットワークを訪れる人がたくさんいます。そこでは、ほとんどの人が「話を聞いてもらえただけで楽になれた」と涙ながらに話します。子どもにとって家庭が一番安心できる場所となるためにも、悩んでいる保護者を支援する場所を増やすことが必要です。

← 20年の活動をまとめた本「ありがとう不登校」。保護者の思いや講演録などを掲載している。「不登校を理解してもらい、子どもがいきいきと学べる社会になってほしい」との思いを込めた。

本に関する問い合わせ先
☎ 090(8398)9726　江上（えがみ）



Interview

登校拒否・不登校に学ぶ
フレンズネットワークくまもと代表　江藤圭子（えとうけいこ）さん

子どもの不登校に悩む保護者などでつくる団体。不登校から学び、孤立しがちな人たちが手をつなぎあえる場所にしようと平成９年に発足した。保護者が体験や悩みを語り合う「フレンズ親の会」を毎月第２土曜に開催中。講演会や学習会も行う。

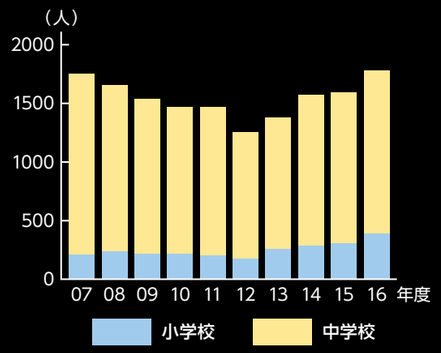
問い合わせ先　☎ 096(345)8847

県内の不登校児童・生徒数 過去10年で最多

昨年度の県内公立小中学校の不登校数が、過去10年で最も多くなったことが県の調査で明らかになりました。公立小中学校に通う児童・生徒数は減少が続く一方、30日以上欠席した不登校の数は1,785人と前の年度から200人増加。学校別で見ると、小学校が前年度比29.4％増の387人、中学校が同8.7％増の1,398人で、全ての児童生徒に占める割合は、小学校が0.4％、中学校が2.9％となっています。

不登校の要因では、親の離婚や引っ越しなど「家庭の状況」が最も多く、「友人関係をめぐる問題」「学業の不振」が続きました。

【不登校児童・生徒数の推移】



出典：文部科学省　平成28年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」結果

困難を有する子ども・若者によりそいましょうin 菊池

■**と　き**　平成30年2月4日㈰ 午後１時開会
■**ところ**　菊池市文化会館小ホール
■**演　題**
❶「不登校は悪いことではない。一人で悩まないで」　登校拒否・不登校に学ぶフレンズネットワークくまもと代表　江藤圭子（えとうけいこ）さん
❷「支え合いから開けてくるもの～非行と向き合って～」
雨やどりの会代表　足立眞理子（あだちまりこ）さん
■**申込期限**　平成30年2月1日㈭
■**申込方法**　電話・メール・FAXで名前と連絡先、所属・団体名をお伝えください。
■**問い合わせ・申込先**
熊本県子ども・若者総合相談センター
☎ 096(387)7000 Ⓕ 096(387)8000
Ⓜ kowaka-cocon@wind.ocn.ne.jp

case5 支援者の声❷

支え合いの地域づくり

子どもを取り巻く環境を改善しようと、支援の輪が広がっています。

子どもたちのためにできること

「はーい、ご飯できたよ！」。子どもたちを呼ぶ声と共に、おいしそうな香りが部屋中に広がります。

隈府にある岩根クリニックに3月、子どもが無料で食事したり、保護者や高齢者がくつろいだりできる憩いの場が誕生しました。運営するのは「マザー&チルドレンの会」の皆さん。メンバーは代表の岩根英治さん、妻の美香さん、市内で飲食店を営む眞原昭一さん、妻の由美子さんの4人です。「家庭の事情で満足に食事が取れなかったり、学校に行けなかったりする子どもが増えている。そんな子どもたちのためにできることをやろうと思った」ことが活動のきっかけです。

毎回10人以上が訪れ、中には不登校の子どももいます。「あいさつしたり、同じ場所でご飯を食べたり、知らないうちに他人とコミュニケーションが取れる場所です。見守りの場でもあります」と昭一さんは説明します。

料理に使う食材のほとんどは寄付で賄っています。美香さんは「最近、食材や本などが届くようになりました。本当にありがたいです」と、関心を持つ人が少しずつ増えてきたことを実感しています。

誰もが自然に支え合う地域へ

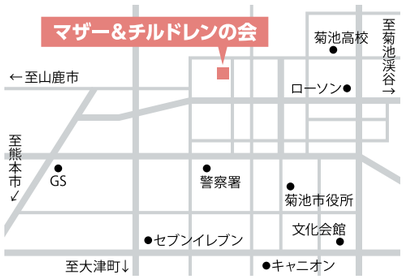
子ども連れで訪れた親は「仕事で帰りが遅く、夕食も子どもだけで寂しい思いをさせていたので助かります」「普段は外に出ようとしない子どもが、ここには喜んで来てくれるんです」と感謝を口にします。

「周りに支えてもらった子どもには『自分も困っている人を助けよう』という意識が芽生えます」と由美子さん。「本当に困っている人が偏見にさらされることなく、誰もが自然に支え合えるような地域が増えていくことを願っています」

1_ 子どもに優しく語りかけながら料理を手渡す昭一さん。「大人も気軽に来てほしい」2_ 料理は由美子さんと美香さんが担当。昭一さんと美香さんが手際よく盛り付ける 3_ 玄関に届けられた米。野菜やお菓子などが寄付で届けられることも 4_ 併設の図書室では読書したり宿題に励んだりする子どもの姿も

マザー&チルドレンの会

- **とき** 毎週水曜日
  午後5時30分～7時30分
- **ところ** 菊池市隈府110
  岩根クリニック2階
- **問い合わせ先** 岩根
  ☎0962(25)4230
- **寄付金の振込先**
  - 銀行名：肥後銀行 菊池支店 普通預金
  - 口座番号：1838053
  - 口座名義：マザーアンドチルドレン
    代表　岩根美香



子ども同士の交流で自立支援

9月9日・10日の2日間、菊池少年自然の家で開催したサマースクールに、14人の小中学生が参加しました。対象は、不登校やその傾向がある小中学生。子どもたちのコミュニケーション力の向上を目的に毎年開催しています。今年は、川遊びや羊毛を使ったタペストリー作りなど、共同作業をしながら交流しました。

「最初は不安そうな子どもたちも、終わるころにはみんなと別れるのを寂しそうにしています。取り組みの成果も出ていて、長期欠席だった子どもが登校できるようになる事例が増えています」と、学校支援コーディネーターの築地新摩耶さんは話します。

未来の可能性を広げるために

サマースクールには、学校復帰を支援する適応指導教室の卒業生も参加し、運営をサポートしています。「支えてもらった恩返しの思いも込めて」運営を手伝う大賀剛瑠さんもその一人。教室やサマースクールでの経験を通して、コミュニケーション力を身につけました。

「教室に通い始めたころはまだ人の顔が見れなくて、ずっと下ばかり向いていました。通学するうちに目線が上がってきて、少しずつ会話ができるようになったんです。サマースクールは、会話が苦手でもゲームをとおしてコミュニケーションが取れたので、自然にみんなと仲良くなれました」

今は専門学校に通いながらアルバイトをしている大賀さんは、ここでの経験がとても役に立っていると言います。「学校に行けなくて悩んでいる子どもたちには、自分の可能性を広げるためにもぜひ参加してほしいですね」

大賀剛瑠さん（高永）

1.2_ サマースクールは「たくさん体を動かし、よく食べ、よく寝る」がモットー。体を動かすことで夜もぐっすり眠れるようになる 3_ 共同作業でコミュニケーション力を身につける

last case 支援者の声❸

子どもたちの笑顔を守る

子どもの笑顔がまちの明るい未来

不登校の数に比例して、ストレスや悩みを抱える子どもが増えています。子どもたちが健やかに成長するには、学校や家庭だけでなく地域の力も必要です。居場所がなくなったときにホッとできる場所、話を聞いてもらえなくなったときに共感してくれる相手がいれば、きっと救われる機会も増えるでしょう。

未来を担う子どもからのイエローカードを真摯に受け止め、学校、家庭、地域で強力なセーフティネットをつくりましょう。子どもたちの笑顔を守ることが、明るい未来のまちづくりにつながるはずです。

早期発見・早期対応で子どもをケア

不登校が増加する要因の一つとして、未然防止の取り組みが足りなかったことが上げられます。そのため市では、今年4月から学校支援コーディネーターやスクールソーシャルワーカー（SSW）を配置し、学校現場からの窓口を一本化したり、関係部署との連携を強化したりするなど、不登校のケアと共に早期発見・早期対応にも力を入れています。例えば、授業に出るのを渋っている子どもがいれば、SSWが現場から話を聞いてカウンセラーにつなぎ、子どもをケアします。

子どもの状況を早期に把握し対応するためには、家庭や地域の連携も必要です。子どもに不登校の傾向があるなど気になることがあれば、一人で悩まずに学校や学校教育課にご相談ください。

問学校教育課学務係
☎0968(72)7231

学校支援コーディネーター
築地新摩耶さん